

刊行にあたって

2025年12月の歯科療報酬改定において、「3次元プリント有床義歯」がついに保険収載されました。3Dプリンターを用いた補綴装置が保険導入されたということは、CAD/CAM冠が保険導入された当時にも匹敵する制度的インパクトといえます。デジタル技術を用いた義歯製作は、一部の先進的な施設のみが取り組む先端医療から、日常臨床のなかで誰もが選択し得る標準的な治療選択肢へと、その位置づけを大きく変えつつあります。

その背景には、歯科技工士の深刻な不足と高齢化という、わが国の歯科医療が直面する構造的な課題があります。口腔内スキャナーや3Dプリンターを活用したワークフローは、通院回数や歯科技工作業の負担を軽減しつつ、データとして保存・複製できるという利点も併せもち、増加する高齢者・要介護者への有床義歯補綴を支える基盤技術としても、今後ますます重要性を増していくと考えられます。

一方で、「保険収載された」という事実だけが先行し、実際にどのような機器を揃え、どのような手順で印象採得から義歯装着までを進めればよいのか、また従来法とどう組み合わせ、院内・院外の歯科技工所とどう連携すればよいのか、具体的なイメージをもてずにいる先生方も少なくないのではないのでしょうか。デジタルデンチャーは決して万能ではなく、その特性を正しく理解したうえで、症例に応じて従来法と使い分ける視点も欠かせません。

本増刊号は、そうした現場の疑問にお応えすることを目的に企画いたしました。第1章ではデジタルデンチャーの保険収載の経緯やIOS・ラボスキャナー選択などの基礎知識を、第2章では従来法と組み合わせたチェアーサイドでの印象・咬合採得や複製義歯・トライインデンチャーによる試適の実際を、第3章では人工歯排列やCAD設計の考え方、3Dプリントとミリングの使い分けといったラボサイドの実務を取り上げます。第4章では臨床医の先生方による総義歯・即時義歯・金属床義歯など豊富な臨床ケーススタディを、そして第5章では機材投資の考え方や院内体制づくり、AI支援設計ツールの動向を含むデジタルデンチャーの将来展望まで、経営的な視点も交えて解説いたします。第一線でご活躍の先生方に、明日からの臨床にすぐに役立つ実践的な内容をご執筆いただきました。

デジタルデンチャーは、義歯製作の一部の工程を置き換えるだけの技術ではなく、患者に提供する価値そのものを底上げし得る可能性を秘めています。本増刊号が、これからデジタルデンチャーに取り組もうとする先生方にとって、その一步を踏み出すための確かな道標となれば幸いです。ご多忙のなか快く執筆をお引き受けくださった諸先生方、そして本増刊号の刊行にご尽力いただいたすべての皆様に、心より御礼申し上げます。

2026年9月

東京科学大学 大学院医歯学総合研究科 高齢者歯科学分野
金澤 学